

くは淡彩の、竹林七賢圖、琴棋書畫圖、山水圖、雲龍圖と共にその一聯をなすもので、爾來海北友松の筆と傳へられてゐる。就中本圖は方丈の東北の間即ち下間上の間西側の襖及び壁貼付となつてゐたもので、その畫格の高きこと本寺襖繪中その首に指を屈すべきものと云へやう。然るに昭和九年九月二十一日の關西地方の大風害のために、建仁寺方丈の倒壊に遭つて大破したので、上記の諸圖と共に現在のごとく挂幅に改裝されたのである。

建仁寺方丈の障壁畫中には、一つも友松の落款を伴はず、また文獻の確證も存しないのであるが、本圖に見られるごとく、その俊剛な筆致の友松畫法たることは、本寺塔頭禪居庵に遺存せる松竹梅圖の襖繪に比較することによつても首肯されるのである。友松の茶道の師古田織部の茶室は建仁寺中に在るといふことは、またもつて友松と本寺との關係の淺からぬを語るものであらう。

また一説に建仁寺方丈は文祿年間に安藝の安國寺から移建されたものといふ。この説に従へば一應文祿年間の製作と考へられ友松六十歳年代の筆と推せられるのである。この製作年次については今しばらく傳稱のまゝを記し後考を俟ちたいと思ふ。

八 玉洲筆山水圖

和歌山 和中 金助氏藏

絹本淡彩 挂幅装 一〇〇・四厘(三尺三寸一分)
横 三・四・五厘(一尺一寸四分)

和中氏藏 玉洲筆山水圖款印(原寸)

本邦南宗畫史上、巨家逸才必ずしも其の人に乏しくは無いが、斯宗發達の早期に立つて全く獨自の畫境を開拓し、一種特異の風采を以て畫壇に臨んだものは玉洲桑嗣燦である。本誌本號掲ぐる所の山水圖の一幀は即ち彼れ玉洲盛時の一作品、いつの時から、南紀の山かけ、斷崖の一角を縫うてまづ直ぐに斜に上る細逕とはの暗い谿谷のせゝらぎの、直下奔流する一場の景致に時ならぬ興趣を覺えたのであらう。こゝに中景幾棟かの樓臺を構へ、また見上ぐるばかりの峯巒を聳て、此の高遠の一山水圖を組み立てたもの、とぼ／＼と長杖を引いて山路を辿る隱士こそ或は彼れ玉洲其の人か。此の圖中景左の方、林木のたたずまひに多少説いて足らぬものと共に、全體の畫致亦一見生硬の感無しとしなが、而も其の生硬なるが如くにして而も筆々自然に出づるを旨とし、強ひて點畫の嫵媚を追ふことを意としなかつた邊こそ、彼れ獨自の畫境、正しく彼の遺著『玉洲畫趣』に『錐を以て沙に畫し、印を以て泥に印する心持』と云ひ、『一筆の利刀を以て銅版に刻みたる墨痕紙上に出』づるを求めたるもの、殊に天を摩する高峯、卒略の皴擦と疎散の點筆との間によく滋潤の氣を捉へ得たのも彼れ生平の用意の然らしめる所であらう。彼は云ふ『愚幼年より只管自畫を成就仕度存念にて一紙も他畫を模し不申候』と。此の畫また此の一面を最もよく傳へるもので、彼が大雅に心酔し伊孚九に私淑し、また芙蓉、兼段を説き、百川を語りながら一も彼等を追模することの無かつたのを示すもの、のみならず、彼が巨家燕村に後れて立ちながら、片言隻句の此の人に及ばなかつたのも、或は其處に柔媚の態を見たものか、此の圖また彼の矜持を明かにする。

同上

玉洲は紀州安原村の豪家の産、姓は桑山名は嗣燦榮また燦に作る。通稱は左内、子瓊或は明而と字し、明光居士、聽雨堂、珂雪堂、雪